

ジュニア小説における性愛という問題

今 田 絵里香

1. はじめに

本稿の目的は、戦後日本の少女小説が、どのようにして男女の恋愛を導入したのかを明らかにすることである。本稿では、この問いを解き明かすために、1960年代後半の「ジュニア小説」とよばれた少女小説に焦点を当てることとし、これがどのようにして男女の性愛を導入したのかを明らかにすることにする。

戦前日本の少女小説は、男女の性愛を扱うことはなかった。それどころか、男女の恋愛を描くことはなかった。たとえば、今田(2007)は、『少女の友』(実業之日本社)という少女雑誌が、男女の性愛はおろか、男女の恋愛を描くことはなかったことを明らかにしている。この雑誌は、少女小説をおもに載せる雑誌である。そして、戦前日本の少女雑誌のなかで、もっとも長きにわたって刊行された少女雑誌である。よって、この雑誌は戦前日本の少女雑誌を代表するものであり、この雑誌が扱っていた少女小説も、戦前日本を代表する少女小説であるとみなすことができる。すなわち、戦前日本の少女小説は、男女の性愛も、男女恋愛も、一切、描かなかったのである。そして、その拒絶の論理の根拠となったのは、戦前日本の男女別学・別カリキュラムを原則とする、学校教育制度であったのである。

一方、戦後日本の少女小説は、男女の恋愛を導入した。たとえば、先行研究は、少女小説・「ジュニア小説」をおもに載せていた、少女雑誌に焦点を当てることで、それらが男女の恋愛を導入してきたことを明らかにしている。今田(2011)は『少女の友』、藤本(2005、2006)、今田(2014)は『女学生の友』(小学館)、今田(2015)は『ひまわり』(ひまわり社)、『ジュニアそれいゆ』(同)、今田(2017)は『ジュニア文芸』をそれぞれ分析の組上に載せ、それらが男女の恋愛をいかに導入してきたかを解き明かしてきた。そして、その導入の論理の根拠となったのは、戦後日本の男女共学・同カリキュラムを原則とする、学校教育制度であったといえる。

ただし、これらの先行研究が焦点を当てるのは、あくまでも男女の恋愛であり、男女の性愛ではない。したがって、先行研究においては、戦後日本の少女小説が、どのような論理で男女の性愛を

導入したのかについては、十分に明らかにされていないといえる。

しかし、「ジュニア小説」にかんする先行研究のなかには、男女の性愛に焦点を当てたものはいくつか存在する。「ジュニア小説」とは、1960年代後半に生まれた少女小説である。久米(2015)によると、少女小説は、1960年代後半において、ジュニア小説に変貌するといわれている。このジュニア小説にかんする先行研究には、代表的なものとして、小谷野(2005)、金田(2002)がある。小谷野(2005)は、集英社の「コバルト・ブックス」について、明らかにしている。「コバルト・ブックス」とは、ジュニア小説の単行本のシリーズで、1965年から150点刊行されているものである。小谷野は、それらが高校生の男女の恋愛を描いたこと、なかでも富島健夫の作品は、高校生の男女の性愛を扱ったことを明らかにしている(小谷野 2005)。また、金田は、1960年代後半において、少女小説がジュニア小説に変化したこと、さらに、1980年代において、そのジュニア小説が、もう一度「少女小説」に変化したことを解き明かしている(金田 2002)。そこにおいては、ジュニア小説が、「男女の主人公が障害を乗り越えて恋愛を成就させる」という構造で描かれていたこと、1970年代においては、その障害が「男性の性欲」とされていたことが、明らかにされている(金田 2002: 31 - 32)。加えて、このような構造が、「異性愛カップル」という規範、「結婚前の男女に性交渉は許されない」という規範を伝える機能を持っていたことが、指摘されている(金田 2002: 32)。

ただし、これらの先行研究は、戦後日本のジュニア小説が、どのような論理で男女の性愛を導入したのかについては、十分に明らかにしていないといえる。

しかし、戦後日本のジュニア小説が、どのようにして男女の性愛を導入したのかを明らかにすることは、戦後日本の少女小説が、どのようにして男女の恋愛を導入したのかを明らかにする上で、不可欠な作業である。というのも、少女小説は、十代の少女を読者として想定しているため、男女の恋愛を導入する場合、「男女の性愛を導入するかどうか」ということが、大きな争点となると思われるからである。たとえば、男女の性愛にかんする描写について、大人が読者であれば、なんの問題にもならないものであっても、十代の少女が読者であれば、「教育上、好ましいかどうか」ということが、大きな議論をよんでいくのではないかと考えられるのである。そして、男女の性愛を導入するという決定を下すにせよ、導入しないという決定を下すにせよ、その背後には、その決定の根拠となる独自の論理が構築されると思われる。そして、その論理は、その社会のあり方と無関係ではないと考えられる。よって、その論理を明らかにすることで、その社会のあり方を明らかにすることができるといえるのである。

本稿の目的は、戦後の少女小説は、どのようにして男女の恋愛を導入したのかを明らかにすることである。ただし、先行研究を検討すると、戦後日本の少女小説においても、ジュニア小説においても、どのようにして男女の性愛を導入したのかについては、十分に明らかにされていないことがわかった。そこで、本稿は、1960年代後半のジュニア小説に焦点を当てることとし、これがどのようにして男女の性愛を導入したのかを明らかにすることにする。

2. 『ジュニア文芸』

本稿の目的を果たすため、どのような分析をするかを、ここでは明らかにしておくことにする。まず、分析の素材は、『ジュニア文芸』（小学館）という雑誌である。これはジュニア小説をおもに載せる雑誌である。ジュニア小説をおもに載せる雑誌には、代表的なものとして、『小説ジュニア』（集英社）、『ジュニア文芸』がある（今田 2017）。そのなかで、この雑誌を分析の素材にする理由は、第一に、この雑誌が、『女学生の友』の別冊として始まったことにある（今田 20017）。『女学生の友』は、1950年4月号から、刊行されはじめた。そして、『別冊女学生の友』の春号が、1966年6月15日に刊行され、夏号が、同年8月15日に刊行される。それをもとにして、『女学生の友 ジュニア文芸』が生まれた。これは、1967年1月号から同年5月号まで、刊行された。その後、『ジュニア文芸』に改題し、1967年6月号から1971年8月号まで、刊行された¹。しかし、『女学生の友』は、少女小説をおもに載せる雑誌であり、『ジュニア文芸』は、ジュニア小説をおもに載せる雑誌である。したがって、『ジュニア文芸』を分析することで、少女小説とジュニア小説の関連を見ることができる。

第二に、この雑誌が、1969年前後から、男女の性愛を導入することがわかっているからである。たとえば、今田（2017）は、『ジュニア文芸』のジュニア小説を分析し、そのジュニア小説では、1967年、1968年においては「握手」、「抱擁」が描かれているが、1969年、1970年においてはそれらに加え、「キス」が描かれていることを明らかにしている。1969年前後において、『ジュニア文芸』が、男女の性愛にかんして、なんらかの方向転換をしたことがうかがえる。よって、『ジュニア文芸』を分析することで、ジュニア小説における男女の性愛の導入と、その論理を明らかにすることができる。

分析素材である『ジュニア文芸』については、今田（2017）が明らかにしているため、そちらを参照していただくことにし、ここでは五点指摘するにとどめることにする。第一に、この雑誌は、もちろんジュニア小説をおもに載せる雑誌である。第二に、代表的な作家は、富島健夫、佐伯千秋である。第三に、ジュニア小説作家は、少女小説作家とは異なっている。最大の相違点は、男性作家が過半数を占めるということである。第三に、代表的な作品は、富島健夫の「おさな妻」（『ジュニア文芸』1969年8月号、10月号～12月号）である。第四に、想定されていた読者層は、中学生・高校生にあたる年齢の女子である。ただし、しだいに男子も含めるようになる。さらには、年齢の幅を上下ともに広げて、若者全体を含めるようになる。第五に、発行部数は、1970年では、毎月20、30万部であったといわれている。

そして、分析する方法は、二点にまとめられる。第一に、『ジュニア文芸』に載っているものを、すべて分析する。これは、編集者、作家、読者の三者の論理を把握するためである。分析する期間は、1968年7月号から1970年12月号までである²。1968年7月号から分析する理由は、先に見た

ように、1969年の前後に、『ジュニア文芸』が、男女の性愛にかんして、なんらかの方向転換をすることがわかっているからである。よって、1969年前後の転換を把握するため、便宜上、1968年の下半期から分析をはじめることとする。また、1970年で打ち切った理由は、1970年を頂点にして、ジュニア小説が衰退の道を辿るからである（金田 2002）。ただし、補足として、1967年1月号から1968年6月号までに載っていたものも、扱うことがある。また、入手不可能であった号もある。1968年8月号、1970年12月号である。

第二に、『ジュニア文芸』の読者通信欄にかんしては、創刊号である1967年1月号から1970年12月号まで、分析する。その理由は、創刊号から編集者、読者の二者のやりとりを見ていくことによって、『ジュニア文芸』の1969年前後の方向転換を促した要因をさぐるためである。

3. 男女の性愛について考える

『ジュニア文芸』がどのようなことをおこなったかを見る前に、前身である『女学生の友』がどのようなことをおこなったかを、初めに把握しておくことにする。今田（2015）によると、『女学生の友』は、1956年から少女小説に男女の恋愛を導入し、1959年から特集記事・座談会記事に男女の恋愛を導入したことが、わかっている。そして、『女学生の友』は、「どのようにして男子とつきあったらいいのか」という難問にたいして、①グループ交際、②両親の許可を得た後に開始する交際、という答えを導き出したことが、明らかになっている（今田 2015）。

一方、『女学生の友』から分離した『ジュニア文芸』は、どのようなことをおこなったかという点、『女学生の友』のおこなったことをさらに進めたといえる。今田（2017）によると、『ジュニア文芸』は、『女学生の友』が向き合った問いをさらに進めた問いに向き合うことになったという。すなわち、「グループ交際の後、どのようにして男子とつきあったらいいのか」という難問にたいして、答えを導き出すことになったのである（今田 2017）。その答えとは、①友人同士としてカップルになってつきあう、②愛の告白、③結婚の約束、④握手・抱擁・キスにとどめる、というものであった（今田 2017）。というのも、『ジュニア文芸』のジュニア小説には、「男女の主人公が、まずは友人同士としてカップルになってつきあい、その後に愛の告白をしあい、結婚の約束をしあう」というパターンが見られるからである（今田 2017）。そして、これは「純愛」というイメージとして表象されていたというのである（今田 2017）。

ところが、本稿の目的に基づいて『ジュニア文芸』を分析した結果、この雑誌は、1968年の下半期から、大きく方向転換をすることがわかった。その方向転換とは、男女の性愛を導入する、という転換である。まず、『ジュニア文芸』は、1968年11月号において、初めて男女の性愛にかんする記事を書き載せる。それが、「男女交際の知恵 アメリカの十代はこうして「性」を学んでいる！」という特集記事である。記事の内容は、アメリカの性教育を紹介するものであった。さらに、同年12月号において、創刊号から毎号掲載されている「人生相談室」が、初めて「愛と性の特集」と

いう特集を組んだ。「人生相談室」は、作家の三浦哲郎が、読者の身の上相談に答えるというものである。そして、1969年2月号においては、「スウェーデンのティーンが学ぶ愛と性の道徳」という特集記事を載せた。この記事の内容は、スウェーデンの性教育を紹介するものであった。

さらに、『ジュニア文芸』は、医学博士の奈良林祥による連載を、1969年4月号から1970年9月号まで、掲載した。今日、奈良林といえば、1971年に『HOW TO SEX——性についての方法』（ベストセラーズ）を出版したこと、そして、それがベストセラーとなったことが、よく知られている（小谷野 2005）。この著書は、奈良林が読者にたいして、男女の性にかんする知識を教えるものであった。そして、この『ジュニア文芸』における連載も、まさしく奈良林が読者にたいして、男女の性にかんする知識を教えるものであった。この連載における奈良林の肩書きは、「マリッジ・カウンセラー」というもので、連載のタイトルは、「正しく性を見つけるために ジュニアのための性講座」というものであった。すなわち、この連載は、マリッジ・カウンセラーが、読者に向かって、男女の性にかんする知識を教えるというものであったのである。

たとえば、この講座の第一回は、「あなたのなかの「性」へのめざめ」という講義になっている。この講義においては、「めざめ」、「性エネルギー」、「女らしさ」、「月経周期」という小見出しで、思春期における女性の身体の変化が扱われている。また、この講座の第二回は、「なぜ男性は何人も女性を愛せるの?」という講義になっている。この講義においては、「精子の生産過剰」、「あなたが美しく見えるとき」、「北欧の性のモラル」、「女性の性はつくられる」という小見出しで、男性の身体の機能が扱われている。

その他、『ジュニア文芸』は、1970年1月号に、「デンマークのティーンはこうして性を学んでいる」という特集記事を載せ、デンマークの性教育を紹介したり、1969年10月号から1970年6月号まで、「私はこう思う ジュニア小説の中の愛と性」を連載し、さまざまな作家に、ジュニア小説における性愛について論じさせたりしている。

これまで、『ジュニア文芸』は、一貫して、純愛のイメージを読者に伝えてきた（今田 2017）。そして、それによって、「グループ交際の後、男子とどのようにつきあったらいいのか」という難問に答えてきた（今田 2017）。ただ、男子とのつきあいが進んでいけば、いずれ性愛の問題に直面することになる。そこで、『ジュニア文芸』は、新たな難問に取り組むようになったといえる。すなわち、男女の恋愛における性愛の問題にたいして、答えを見つけようとしはじめたのである。

4. メディアによる批判

ところが、『ジュニア文芸』の方向転換にたいして、メディアは猛烈に批判を開始する。ここでは、このメディアによる批判を見ていくことにする。最初にその批判をおこなったのは、『朝日新聞』である。『朝日新聞』（東京）（夕刊）は、「いまやむかし「星よ、スマレよ」 少女小説セックスがいっぱい」という記事を、1970年1月21日に載せる。

少女小説の世界がガラリ変った。おとなたちが叙情の世界とばかり思いこんでいるうちに、いつの間にかセックスがはらんしている。主人公の女子高校生がキスをする段階はとうにすぎ、小説、身上相談ともおとなの雑誌そのまま、性の位置づけにゆれ動いている。吉屋信子、吉田絃二郎氏らが築きあげた「星よ、スマレよ」の世界は全く消滅した。(『朝日新聞』1970年1月21日)

このように、『朝日新聞』は、少女小説に「セックス」の描写が氾濫している、と批判するのである。

ただし、今日では、「セックス」はおもに性交という意味で使用されるため、後世において、誤解を招いてきたきらいがあるが³、この時代においては、「セックス」は広く「性」という意味で使用されていたようである。よって、ここで「セックスがはらんしている」というのは、性交にかんする描写が氾濫しているという意味ではなく、性にかんする描写が氾濫しているという意味である。

わかりやすい例でいうと、『ジュニア文芸』では、「性」に「セックス」というルビをふっていることが、しばしばある。

抽象的だといわれそうだが、性（セックスというルビ——引用者）を美しく考えるか汚く考えるか、若い人達にとってこれが問題なのだ。(略)

(略)

僕はすでに恋愛さえできなくなった大人達が、性というものを玩具にしている現象を、みなさん達若い人達に対して恥ずかしいと思っている。

(略)

(略)僕は(略)あなたがたに対して“近ごろの若い者の性（セックスというルビ——引用者）は乱れてる”など、いいかげんなことはいわない。(宮敏彦「私はこう思う ジュニア小説の中の愛と性」^⑧ だれに性を語る資格があるのか?」『ジュニア文芸』1970年5月号)

たとえば、このような文章などである。この例では、二か所の「性」に、「セックス」というルビがふられている。すなわち、「性を美しく考えるか汚く考えるか」と、「若い者の性は乱れている」である。これらの意味を考えると、今日のように、「性交」に限定して使われているのではないことがわかる。どちらかという、広く「性」、あるいは、「性にかかわるもの」という意味で使われているといえる。

ジュニア小説における使用例を見ると、さらにわかりやすいと思われる。ジュニア小説においては、「朝ちゃん、男と女のセックスがちがう、ってこと、わかってるだろ?」、「うん」(粉川宏「朝子の青春相談ノート」『ジュニア文芸』1970年2月号)というやりとりが出てきたり、「キスとい

うのは、愛の行為であってこそ美しいんだぜ。(略)しかし、セックスのキスは、人間をおぼれさせる」、「ロマンチストとってくれ。オレにだって、十八歳のセックスはある。しかしな、せっかくここまで持ちつづけてきたセックスの白を、オレはあそびでよごしたくないんだ。愛しあう彼女といっしょに、セックスをわけあっていきたい主義さ。愛の感激の奔流の中で、セックスとは何か、みきわめたいんだ」(佐伯千秋「燃えた海」『ジュニア文芸』1969年4月号)というセリフが出てきたりする。これらの使用例を見ても、「セックス」は「性」という意味合いで使われていると考えられる。

また、『朝日新聞』の記事が批判する「少女小説」とは、『ジュニア文芸』、『小説ジュニア』、『小説女学生コース』の少女小説を示している。すなわち、ジュニア小説のことなのである。

そして、『朝日新聞』は、この記事を見る限り、戦前の少女小説と、戦後のジュニア小説を、異なるものとして捉えているといえる。この記事によると、戦前の少女小説は、吉屋信子、吉田絃二郎を代表的な作家とするものである。そして、「叙情の世界」、「星よ、スマレよ」の世界を描いたものである。この記事は、他に、「純情が売りものだった昔」とも捉えている(「いまやむかし「星よ、スマレよ」少女小説セックスがいっぱい」『朝日新聞』1970年1月21日)。一方、この記事によると、戦後のジュニア小説は、「セックスがいっぱい」というものなのである。

この記事の前後で、『朝日新聞』は類似の記事を載せている。まず、ほぼ一年前の1969年1月26日には、「十代に群がるSEX 中高生雑誌にも進出」(東京)(朝刊)という記事を掲載している。この記事では、「性を扱ったティーンエージャー向けの雑誌が出はじめた」としている。もちろん、この記事の「SEX」は、「性」という意味で使われていると考えられる。すなわち、この記事は、中学生・高校生向けの雑誌が、性愛を扱いはじめたことを指摘するものなのである。ただし、この記事で名指しされているのは、『女学生の友』である。その上で、この記事は、教師による批判の声を載せている。「不健全な性の知識が容しゃなく中学生に注入されている」と。さらには、親にたいするインタビューも載せている。一つは、「性道徳として正しい純潔教育を早めに教え、雑誌などを批判する能力をつけてほしい」という声と、もう一つは、その声と相反する「性教育はねむった子を起すようなもの」という声である。教師の声においても、親の声においても、雑誌を批判しているといえる。すなわち、この記事は、雑誌を批判する教師の声、親の声を載せることで、性愛を扱いはじめた雑誌を批判しているのである。

そして、1970年1月21日の「いまやむかし「星よ、スマレよ」少女小説セックスがいっぱい」という記事の後においては、『朝日新聞』は、1970年2月1日に、読者通信欄である「声」欄において、「特集ジュニア小説と「性」」(東京)(朝刊)という特集を組んでいる。ここでは、ジュニア小説作家の富島健夫、津村節子の投書と、母親の投書、そしてジュニア小説の読者の投書が載せられている。そして、『朝日新聞』の記者の意見が載せられている。これらの投書を見てみると、富島健夫は『朝日新聞』のジュニア小説にたいする批判にたいして、「過去の小説とは無縁」というタイトルの投書によって、反論をしている。また、読者の投書は二通載っているが、二通とも、そ

れぞれ「おとなは何も教えてくれぬ」、「興味本位には読まぬ」というタイトルの投書によって、反論している。一方、津村節子は、『朝日新聞』のジュニア小説にたいする批判にたいして、「ともに考える姿勢を いたずらな刺激を避けて」というタイトルの投書によって、賛同している。また、母親も、「もっと夢のある読物与えて」というタイトルの投書によって、賛同している。そして、記者の意見は、もちろん、「エスカレートが心配 望まれる編集者のきびしさ」というタイトルの文章によって、ジュニア小説にたいする批判を展開している。すなわち、この特集は、反論を載せてはいるものの、大筋はジュニア小説にたいする批判を展開するものとなっているといえるのである。

さらに、他のメディアでも、ジュニア小説にたいする批判が繰り返されたようである。『ジュニア文芸』によると、1970年1月21日の「いまやむかし「星よ、スマレよ」少女小説セックスがいっぱい」という記事が出た後、他社の新聞、雑誌、テレビで、類似の報道がなされたとされている⁴。すなわち、さまざまなメディアが、こぞってジュニア小説の批判ををはじめたと捉えることができるのである。

5. 性教育にたいする批判

このメディアによる批判にたいして、『ジュニア文芸』は、真っ向から反論をしている。ここでは、『ジュニア文芸』の編集者、執筆者の反論を見ていくことにする。『朝日新聞』の「いまやむかし「星よ、スマレよ」少女小説セックスがいっぱい」という記事をうけて、『ジュニア文芸』は、1970年4月号において、「朝日新聞記事を否定する！ 「少女小説にセックスがいっぱい」に私たちは抗議する！」という特集を組んだ。この特集では、最初に、編集長の林力が、「オトナの無知と偏見を打ち破ろう！ 朝日新聞記事を否定する」という記事を載せている。

一、“少女小説セックスがいっぱい 知らぬは親ばかり”というのは事実反する。

掲載された小説の一部分だけを抜き出して、セックス記事が氾濫しているような印象を与えている。“知らぬは親ばかり”というのも誤りである。(略)

一、小説の内容にふれていない。

(略) 性の部分だけを抜き出すことによって内容にはまったく目をつぶり、巷に氾濫しているエロ小説を想像させるような印象を与えている。

一、これがもっとも重要な点だが、このような記事の発想法の根底にあるもの——オトナのエゴイズムである。そしてオトナのエゴイズムにおもねるマスコミである。

長い間、性の問題についてオトナたちのとってきた態度は、“クサイ物にはフタをしろ”というやり方でした。この方法が現在ではむしろ誤った方法であると考えられていることは、だれも異存のないところだと思います。

(略)

現在、いわゆるオトナの世界を見渡してみると、目にふれるところ、“セックス”のないものはない、といっても言いすぎではないと思います。新聞、雑誌、テレビ、映画、はては広告までいたるところにみられます。オトナはすでに性の氾濫に無感覚になりつつあるのではないかと、思われるほどです。皆さんを、それらすべてから隔離することはとても不能なことです。それよりも、セックスに対する正しい対応の仕方とはどんなものか、それを皆さんといっしょに探していきたいのです。

一、『ジュニア文芸』は性の問題を興味本位には扱わない。

(略) すぐれた読者は興味本位の性にはソッポを向きます。(略) (林力「オトナの無知と偏見を打ち破ろう! 朝日新聞記事を否定する」『ジュニア文芸』1970年4月号)

この文章の他、この特集においては、富島健夫が、「はてさて、困ったおとなたちよ」というタイトルの文章を載せたり、三木澄子が、「最後のひとりになっても」というタイトルの文章を載せたりしている。また、二人の読者も、それぞれ「なぜこんなに騒ぐのかしら?」、「私たちは子どもじゃない」というタイトルの文章を載せている。これらの文章は、すべて『朝日新聞』にたいする反論である。そして、その反論は、林の展開する反論と、非常に似通ったものとなっているのである。

林の『朝日新聞』にたいする反論の要点は、二つにまとめることができる。第一に、『朝日新聞』の批判は、事実と反するという点、第二に、大人のメディアには、性描写が氾濫しているにもかかわらず、そして、そのようなメディアから、十代の男女を隔離することは不可能であるにもかかわらず、「クサイ物にはフタをしろ」という形で、十代の男女にたいし、性にかんする知識を一切教えないというのは、誤っているということである。

第一の点は、今田(2017)によるジュニア小説の分析結果を見ると、『朝日新聞』と『ジュニア文芸』のどちらの主張が正しいかは、明らかである。今田(2017)によると、『ジュニア文芸』は、あくまでも純愛というイメージを、読者に伝えようとしていた雑誌であるとしている。ゆえに、『ジュニア文芸』におけるジュニア小説を分析してみると、愛情をあらわす行為は、主人公の男女に限定すれば、1969年、1970年においては、「握手」、「抱擁」、「キス」が多数を占めるというのである(今田2017)。そして、ストーリー構造は、主人公の男女が、純愛を成就させるというものが、ほとんどであるとするのである(今田2017)。したがって、『ジュニア文芸』には、キス以上の性行為の描写が氾濫しているとか、大人の雑誌そのものであるとか、そういったたぐいの『朝日新聞』の批判は、事実無根のものといえる。『朝日新聞』でも、後日の記事である「特集ジュニア小説と「性」」では、記者がじっさいにジュニア小説を読み、「抱合っている場面とか、キスシーンのさし絵は多いが、現代の世相から見ればそれほど目くじらたてて騒ぐほどのものでもない、まず平板な通俗小説だ」といっているくらいなのである(「特集ジュニア小説と「性」」『朝日新聞』(東京)(朝

刊) 1970年2月1日)。

また、小谷野(2005)が指摘するように、ジュニア小説作家のなかでは、富島健夫が、もっとも男女の性愛を扱った作家であると思われる。富島自身、このメディアによるジュニア小説批判は、自身だけに向けられるべきものだったのではないかと捉えている。「バカな連中はぼくを攻撃するのをあせったあまり、「ジュニア小説」全部を攻撃してしまった感がある」(「はてさて、困ったおとなたちよ」『ジュニア文芸』1970年4月号)と。しかし、もっともメディアから批判されてしるべきである、と捉えられている富島の作品は、まさに男女の主人公の純愛を描いたものなのである。そもそも、富島は、「ぼくは少女が書けないんですよ。ぼくの理想の女性像だけを書いている」、「ぼくはやまとなでしこが大好きなんだ」(「トップ対談 佐伯千秋 富島健夫 はばたけジュニア小説」『ジュニア文芸』1968年4月号)と、吐露するように、富島の理想の少女、純情可憐な少女を描くことを、得意としていたのである。そして、その純情可憐な少女を一途に愛する少年、すなわち清廉潔白な少年を描くことで、読者の支持を獲得していたのである。さらに、富島は、女子読者もまた、純情可憐な少女であると、捉えている。そして、その純情可憐な読者に向けて、作品を書いていると、断言しているのである。「ぼくは、ぼくの五十万読者のほとんどが清純な乙女であることを確信している(略)。(略)つまりぼくは、今のきみたちが、かつてぼくが少年の日にあこがれた初恋の人とまったくちがいはないという認識の下に生きており、だからこそ作品を書いているのである」(「一九七〇年に思う 青春と真実」『ジュニア文芸』1970年1月号)と。すなわち、富島は、純情可憐な少女たちに向けて、その少女たちが理解可能であるとみなせるストーリーとして、純情可憐な少女と、清廉潔白な少年の純愛の紡ぎ出すストーリーを作っていたのである。

たとえば、富島の代表的な作品は、「おさな妻」である。これは、「幾山河」(1969年8月号)、「人という悲しみならず」(1969年10月号)、「おさな妻」(1969年11月号)、「君に誓う」(1969年12月号)という4作品から構成されている作品である。主要なキャラクターは、高校二年生の玲子、吉川まゆみ、そして、まゆみの父親である吉川誠一である。

あらすじはこうである。玲子は、母親と二人きりで暮らしていた。しかし、玲子が高校二年生のとき、母親は亡くなった。玲子は、母親の妹である叔母一家と暮らすことになる。ところが、叔父が玲子を強姦しようとしたため、玲子はアパートで一人暮らしをすることになった。そして、かつて玲子も通っていた保育園で、アルバイトをしつつ、高校に通うことになった。その保育園には、まゆみという園児がいた。まゆみは、三年前に母親を亡くし、父親の誠一と二人きりで暮らしていた。誠一は、「一流」といわれる大学を出、「大手」といわれる出版社に勤めていた。また、容貌にも恵まれ、28歳という若さであった。そのため、まわりは再婚を勧めていたが、誠一は、亡き妻を愛するあまり、それを拒んでいた。保育園では、まゆみは、亡き母にそっくりの玲子から、片時も離れなくなった。玲子もまた、かつて通園していた自分に、顔も境遇もそっくりであるまゆみが、かわいくてたまらなくなった。そして、玲子は、叔父の行為を思い出したり、アパートの女性たちの性的放縦を目撃したりするなかで、大人に嫌悪感を覚えるのであったが、同時に、そのような大

人とはまるっきり違う誠一に、惹かれていった。誠一も、亡き妻にそっくりの玲子をひそかに愛すようになった。やがて、玲子は、誠一からプロポーズされ、それを受け入れる。そして、高校三年生の春、玲子は誠一と結婚した。その後、玲子は、高校に通いながら、家事、育児に奮闘する。このようなあらすじである。

この作品では、たしかに、強姦未遂の場面、アパートの女性たちの性的に奔放である場面、結婚後の初夜の場面、新婚生活の諸場面が描かれているが、それらはあくまで間接的な描かれ方にとどまっている。また、強姦未遂の場面、アパートの女性たちの性的に奔放な場面は、主人公の男女の純愛をきわだたせるために、描かれているといえる。なぜなら、主人公は、それらにたいしていいような嫌悪感を覚え、そしてその嫌悪感があるがゆえに、結婚前の純潔を重要視するようになるからである。たとえば、読者通信欄には、「8月号で、おとなのみにくさを描いてくださって、こんどは、吉川さんのようなりっぱなおとなを描いてくださったことに感謝しています」（『JN 広場』『ジュニア文芸』1969年11月号）という通信が載っている。これを見ると、読者のほうでも、1969年8月号の「幾山河」で描かれた叔父の醜悪さと、吉川誠一の素晴らしさを対比させて捉えていることがわかる。そして、結婚後の初夜の場面、新婚生活の諸場面は、美化して描かれ、「あたしはあの人を愛し、あの方はあたしを愛してくれる。その象徴的な行為なのよ」と、賛美されている。このように見ると、富島健夫の作品では、主人公の男女はあくまで結婚前の純潔を重んじ、純愛を貫こうとしていることがわかる。

第二の点は重要である。なぜなら、『ジュニア文芸』においては、この論理が頻繁に出てくるからである。なぜかという、この論理は、『ジュニア文芸』が、性愛の問題に取り組むことになった根拠として、用いられているからである。すなわち、「大人のメディアに性描写が氾濫しているにもかかわらず、学校教育における性教育は不十分である。だからこそ、『ジュニア文芸』が性教育を実施する」という論理が示されているのである。たとえば、次の編集者による文章である。

本誌連載中の奈良林祥先生の「ジュニアのための性講座」には、おどろくほどたくさんの読者から反響が寄せられています。わが国のジュニアが正確な性知識を、どんなに求めているかのあらわれでしょう。

また本誌では先に、スウェーデンとアメリカにおける性教育の授業をルポルタージュして紹介しました。(略) この記事にたいしても、数多くの読者からうらやむ投書が送られてきました。

そこから感じられるのは、わが国の性教育はゼロにひとしい、日本のジュニアは性を知る機会をほとんどあたえられていない、ということです。これでいいのでしょうか。(「日本でもこうして“性”は学ばれている 東京のある女子高校の場合」『ジュニア文芸』1969年10月号)

このように、編集者は、学校教育における性教育が不十分であるとして、厳しい批判を展開しているのである。

もちろん、作家もこの論理を共有している。典型的なものとして、森一步の文章がある。

きみたちが持っている問題の中に、愛と性の問題があります。(略)

(略)

きみたちは、それを知りたいと思います。だが、ここでもきみたちは、ある壁にぶつかります。教育も文学も、それほどはっきりととりあげていないからです。

では、実際はどこから、それらの知識を得ているのでしょうか。K 県の高校生を対象に調査した結果によりますと、そのほとんどが、週刊誌などから得ているようです。

週刊誌のなかには、性をひどく誇張して、それを売りものにしてしているようなものがあります。おとなが読んでも、恥ずかしくなるようなものがあります。

(略)

「体を触れ合っただけです。妊娠するのでしょうか」

「私は彼にすべてをあげようと思っています。これは……」

こんな手紙が、毎日のように私のところに配達されます。

思いすごし、無知、軽薄、不純……読んでいて、そのあぶなっかしさに、あぜんとしてしまいます。

(略)

以上のことから、私は、作家が性のことをとりあげることには大きな意義があると思うのです。(森一步「私はこう思う ジュニア小説の中の愛と性① 責任と自信をもってとりあげる“性”」『ジュニア文芸』1969年10月号)

このように、「メディアに性描写が氾濫している。にもかかわらず、性教育が不十分である。だからこそ、『ジュニア文芸』が性教育を実施する」という論理が、編集者にも執筆者にも共有されていたのである。

6. 女子読者の要望

しかし、『ジュニア文芸』は、どのような根拠をもってして、学校教育における性教育が不十分であると捉えていたのであろうか。ここでは、このことを考えてみる。『ジュニア文芸』の編集者、執筆者の文章を読むと、今まさに学校教育を受けている女子読者が、『ジュニア文芸』の編集者、執筆者にたいして、性教育が不十分であることを訴えてきたり、性教育を実施してほしいと要望してきたりする、と捉えられていることが、見えてくる。たとえば、先の森一步の文章からも、そのことがうかがえる。森は、女子読者が、性にかんして教えを乞う手紙を送ってくるとしている。そして、そのことをもってして、作家が性教育を実施することには大いに意義がある、としているの

である。

どうやら、作家たちは、女子読者から、頻繁に、悩みを綴った手紙をもらっていたようである。たとえば、『ジュニア文芸』の二大作家の一人、佐伯千秋は、「私にくるの（ファンレター——引用者）は、ほとんど人生相談的なものなんですよ」（「トップ対談 佐伯千秋 富島健夫 はばたけジュニア小説」『ジュニア文芸』1968年4月号）と、証言している。また、二大作家の残る一人、富島健夫は、「よく電話でセックス問題（性の問題——引用者）の相談を受けます。この間も、高一の女の子からこんな電話がありました。同級生の男の子と愛し合って、肉体関係にすすんでいるんですね。（略）どうも妊娠もしているらしい。（略）ぼくは相手の男の子に怒りを感じたな。高一くらいじゃいっしょに生活できるわけがない。それなのに肉体関係を求めて、子どもが生まれたら、どうなるんでしょう。結局傷つくのは女のほうですよ」（「トップ対談 佐伯千秋 富島健夫 はばたけジュニア小説」『ジュニア文芸』1968年4月号）と、打ち明けている。作家は、このような女子読者の手紙を根拠として、学校教育における性教育が不十分であることを批判するのである。そして、性教育が不十分であるせいで、女子読者が性にかんして無知になってしまい、結果として、望まない性行為をしてしまい、純愛を貫くことができなくなってしまうとして、大いなる危機感を覚えているのである。

なにゆえに「ジュニア雑誌」で性を描写することがタブーとされねばならないか、ぼくは理解に苦しむ。（略）

（略）

人間の真実として存在するものに目をつむることがよいことであろうか。

多くの若い女性の悲劇と転落が、純潔に対する無知から生じている事実。知識よりも先に行為に直面する危険。それらをどう考えるであろうか。

すでに生理のある女性が、生理の意義をあらゆる角度から知ることによって女性としての自覚を持つことはいけないことであろうか。

ぼくは、「ジュニア小説」においてとくに限界を設定することは、青春前期に生きる人たちを軽んじているゆえんだと断ぜざるを得ない。軽んじられることにあまんじている人は、ぼくの小説を読まなくてよいのである。（富島健夫「私はこう思う ジュニア小説の中の愛と性② 書きたいものをぼくは書く」『ジュニア文芸』1969年11月号）

富島健夫は、このように、女子読者が性にかんして無知であることは、女子読者にとって、大きな損害をもたらすことになりかねない、としているのである。

先にも見たように、『ジュニア文芸』では、作家の三浦哲郎による、「人生相談室」を毎号載せている。この「人生相談室」においても、読者の性にかんする悩みが、頻繁に載せられている。三浦哲郎は、「手紙がいっぱいくるんだ。（略）やはり多いのは、男女交際の悩みだな。それとセックス

(性——引用者)の問題。(略)本誌七月号でも、義理の兄になる男性とあやまちを犯したひとの相談が出てるね。こんなのもあった。実父が死んで母親が再婚したんだが、その義理の父親がいたずらするのでこわいというんだな(「三浦哲郎先生を囲んで読者座談会青森版 みんなで人生を考えよう」『ジュニア文芸』1967年8月号)と、証言している。

そのような女子読者の要望を、じっさいに見ることができるのが、読者通信欄である。読者通信欄を見ると、女子読者が、メディアにおける性描写の氾濫を批判し、性教育の不十分であることを嘆いていることがわかる。そして、それゆえに、性にかんする知識を獲得したいと切望していることが、うかがえる。

“性”のことをとりあげても、家庭や学校ではくわしく教えてくれません。となると、本でしか……となります。本といっても、そこにはしばしば、ゆがめられた“性”が書かれています。けれども、ジュニア文芸は、“性”というもののすばらしさを教えてくれます。

(略)

うちでは、母もときどきジュニア文芸を読んでいます。そして母は“性”についてほんの少し教えてくれました。“性”というものは不潔ではないし、また、そんな考え方をしてはいけない、とも教えてくれました。母はきっとジュニア文芸を読んで、話すきっかけをつくったのだと思います。

今の私は、友だちと話をする時、不潔を感じるほうがよほど不潔だということを話し合えるようになりました。(「JN 広場」『ジュニア文芸』1970年5月号)

近ごろ、無知な高校生や社会人が妊娠するというケースが多くなってきていますが、それは、日本の性教育が遅れていることを証明しているのではないのでしょうか。

そのおこなっている性教育、まちがっている性知識を正し、教えてくれるのがジュニア文芸です。(「ジュニア論壇」『ジュニア文芸』1970年10月号)

このように見てくると、『ジュニア文芸』は、一貫して、女子読者の抱える難問に、答えを示そうとしてきたことがわかる。すなわち、「グループ交際の後、どのようにして男子とつきあったらいいか」という難問である。この難問を考えるためには、男女の性愛の問題を考えることが、不可欠である。グループ交際を終え、カップルになって交際をはじめたとたん、男女の性愛にどのように向きあうかが、大きな壁となってたちはだかつてくるからである。その難問にたいして、『ジュニア文芸』が導き出した答えは、「純愛を貫く」というものであった。そのために、1968年からは、性愛の問題を取り扱い、女子にたいして、性にかんする知識を与えるようになったといえるのである。

7. ジュニアとは誰か

とはいえ、いったいどうして、1968年の下半期から、『ジュニア文芸』は、読者にたいして性教育を実施することになったのであろうか。その答えは、1967年における『ジュニア文芸』の読者層の開拓と、その失敗にある。どういうことであろうか。このことを、読者通信欄である「JN 広場」（1967年7月号まで「読者応答室」）を分析することで、見ていくことにする。

先に見たように、『ジュニア文芸』は、純愛というイメージを読者に伝えようとしていた（今田2017）。そうであるとすると、いったい誰にたいして、純愛というイメージを伝えようとしていたのか、という疑問が、その先に浮かんでくる。核となる読者層が、中学生・高校生の女子であったということを考えると、中学生・高校生の女子であったのだろうか。そうであるなら、とくにめずらしいことではないといえる。なぜなら、女子にたいして、結婚するまで純潔を守ることの大切さを伝えることは、戦前からおこなわれていたことだからである（牟田1996）。ところが、そうではなかった。『ジュニア文芸』は、女子にも男子にも、純愛というイメージを伝えようとしていたのである。

もちろん、当初、『ジュニア文芸』は、中学生・高校生の女子を読者として捉えていた。そもそもこの雑誌の前身は、『別冊女学生の友』である。ゆえに、『女学生の友』の読者を引き継いでいたのである。

しかし、1967年5月号の通信欄に、初めて男子の投書が載った。「ぼくは『ジュニア文芸』の創刊号を見て以来、ファンになった。しかし気になることは、「パピエール」（読者文芸欄——引用者）やこの「読者応答室」の投書者の名まえを見てもわかるとおり読者はすべて女性ではないか。（略）男性読者も堂々と投書欄に顔を出そうではないか」（「読者応答室」『ジュニア文芸』1967年5月号）と。同年6月号にも、男子からの投書が載った。「ぼくは高校三年の男子です。そして、『ジュニア文芸』の愛読者でもあります」（「読者応答室」『ジュニア文芸』1967年6月号）と。編集者は男子読者を歓迎した。そして、男子読者の増加に合わせて、雑誌のタイトルを『女学生の友 ジュニア文芸』から、『ジュニア文芸』に改めたのであった。「男子の読者がふえていることを、編集部員一同、うれしく思っております。今月号の表紙をごらんになればおわかりのように、タイトルから『女学生の友』がはずれました。これからも、女子だけでなく、男子が読んで楽しめる、若い人の雑誌にしていきたいと思います」（「読者応答室」『ジュニア文芸』1967年6月号）と。このように、編集者は、喜んで男子読者を迎え入れたのである。

男子読者の投書は、引き続き増加した。それとともに、男子読者を受け入れる女子読者の投書も、増加した。1967年7月号には、男子読者の「こんないい本を女性なんか独占させるなんて、まことにもってくだらん話だ」という投書、女子読者の「『ジュニア文芸』は、男の子も女の子も共に楽しめる雑誌だと思います」という投書が載っている（「読者応答室」『ジュニア文芸』1967年7

月号)。同年8月号には、男子読者の「ぼくは『ジュニア文芸』の大ファンです」などという投書が四通、女子読者の「女性だけで読むのはもったいないようです」という投書が一通、載っている。男子も女子も、男子読者増加を歓迎していることがうかがえる。

そして、男子の投書が増えるとともに、男子の「おしかり」の投書も増えた。編集者は、編集者にたいする「おしかり」の投書のなかで、男子読者のことを考えよというもの、多数を占めるとしている。「その中（「おしかり」の投書のなか——引用者）でもっとも多いのは、『ジュニア文芸』は女性だけの雑誌ではないはずだ、もっと男性の読者のことを考えて編集せよ、ということです」（『編集後記』『ジュニア文芸』1967年8月号）と。しかし、編集者は、このような「おしかり」の投書を真摯に受け止めて、男子読者増加のために奮闘することを誓っている。

本誌はけっして男性の読者を無視しているわけではありません。それどころか、男性の読者が増加することに非常に喜びを感じています。真に若い人たちの雑誌になるには、男女ともが読める雑誌でなければならないと思うからです。

今後、誌面の上でも、男性の読者にご満足いただけるよう具体的なプランを実現していく考えでおりますので、なおいっそうのご支援をお願いします。（『編集後記』『ジュニア文芸』1967年8月号）

さらに、この1967年8月号では、『ジュニア文芸』の読者について、女子に限定するものではないと宣言している。編集者は、「すべての若い人たちに読んでいただきたい」（『JN広場』『ジュニア文芸』1967年8月号）としたのである。

まとめると、男子読者を増加させるために、編集者は、①タイトルから「女学生」を削除して、「ジュニア」のみとし、②男子の要望を受け入れることにし、③想定する読者層について、男女を含んだ「若い人」としたのである。

編集者が、男子読者増加を見込めると判断したのは、その背後に確固たる根拠があったからである。その根拠とは、ジュニア小説をおもに載せる雑誌が、日に日に読者の支持を獲得していき、その読者層が、しだいに量的拡大していきつつあるという事実であった。『朝日新聞』（東京）（朝刊）は、1967年8月29日に、「かくれたベストセラー ジュニア小説」という記事を載せている。それによると、「ジュニア小説作家の描く純愛小説は、高校生を中心とする十代の心を揺さぶって、いまやひそかなブームを呼んでいる」と、しているのである。なぜなら、ジュニア小説をおもに載せる雑誌である、『ジュニア文芸』、『小説ジュニア』、『小説女学生コース』（学習研究社）の三雑誌で、月60万、70万の発行部数を叩き出すようになったからである。よって、「おとなの雑誌も顔負けとってよい」と捉えられているのである。この記事を見ると、ジュニア小説が、いわゆる純愛小説と捉えられる小説であること、そして、その純愛小説が、ひそかなブームとなっていることがうかがえる。

さらに、この記事は、『ジュニア文芸』の編集主任の言葉も紹介している。「これからは、男の子にも愛読される本格的な青春文学を、打出していきたい」というものである。『ジュニア文芸』の編集者が、読者層の量的拡大を根拠にして、今後、男子もその読者層のなかに取り込んでいきたいと思っていることが、うかがえる。

『ジュニア文芸』が、男子を取り込もうとした理由は、二つあると思われる。一つは、もちろんそれが、読者層のさらなる量的拡大につながるからである。ジュニア小説雑誌は、すでに三つ存在する。『ジュニア文芸』、『小説ジュニア』、『小説女学生コース』である。それゆえ、『ジュニア文芸』も、けっして読者獲得競争と無縁ではなかったはずである。たとえば、男子読者を取り込もうとする企ては、『ジュニアそれいゆ』にも見られる(今田 2015)。先行雑誌の『ひまわり』は、「少女」というカテゴリーを称揚することで、女子読者の支持を得ようとしていたが、後続雑誌の『ジュニアそれいゆ』は、「ジュニア」というカテゴリーを称揚することで、高田賢三、金子功ら、ファッションに興味のある男子読者の支持を集めようとしていたのである(今田 2015)。

もう一つは、『ジュニア文芸』の純愛というイメージを現実のものとするためには、男女双方にたいする訴えかけが、不可欠であったからである。戦前においては、男女別学・別カリキュラムの学校教育制度のもとで、思春期の男女を引き離しつつ、男子には性的放縦を許した。一方、女子には性的放縦にスティグマを与えた。そして、純潔の尊さを教えた。さらに、いつ純潔を手放すかは、親によって決められた。すなわち、親の決めた結婚を受け入れさせたのである。このように、女子のセクシュアリティを徹底的に管理することによって、結婚前の女子には純潔を尊ばせ、結婚後の女子に純潔を手放させたのである。しかし、戦後においては、女子のセクシュアリティを徹底的に管理することは、困難になった。なぜなら、男女共学・同カリキュラムの学校教育制度のもとで、思春期の男女を隔離することが難しくなったからである。それどころか、思春期の男女が親しく交際することが、少女雑誌など、さまざまなメディアで、しだいに奨励されるようになったからである(今田 2014)。よって、結婚前の女子に、純潔を大切にさせることが、困難になった。しかし、結婚前の女子が純潔を手放すことになれば、純愛の理想が破壊されることになる。したがって、女子にのみ純潔の尊さを教えたり、純愛の素晴らしさを訴えたりするだけでは、不十分であるという事態に陥った。思春期の男女が親しく交際するなかで、女子が純潔を大切にしようとしたり、純愛を貫こうとしたりしても、男子がそれに協力しなければ、純潔も、もちろん純愛の維持も、危うくなるからである。だからこそ、『ジュニア文芸』は、男子読者を取り込み、男子にも純愛というイメージを伝えようとしたのである。

編集者が、男子にも、純愛というイメージを伝えようとしていたことは、その言葉からうかがうことができる。たとえば、読者通信欄では、女子読者が、純愛というイメージにたいし、理想化されすぎて現実離れしている、という批判をすることがあったが(今田 2017)、男子読者も、そのような批判をすることがあった。次の投書である。

世の中の男性は（このオレを含めて）なぜモテないのか？ 世の中の若い女性みんな『ジュニア文芸』を読んで男性を理想化しすぎているのではないか？ これが問題だ！ 若い女性が『ジュニア文芸』を読むことは、われわれ男性は喜んでいいのか、悲しんでいいのか？（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年8月号）

この投書にたいして、編集者はこのように答えている。

もちろん喜ぶべきことですよ。ただ女性だけがいい雑誌を読んで賢くなるのに、男性がこれに追いつかないのでは困ります。男性も負けずにがんばってください。男性と女性がお互いに理解し合い、議論し合ってお互いに美しい豊かな人生をきずいていく——『ジュニア文芸』が、そのための最良の友となり、なかだちとなるはずです。（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年8月号）

このやりとりを見ると、編集者は、女子にも男子にも、純愛というイメージを伝えることを望んでいたことがわかる。

『ジュニア文芸』は、この目的を果たすために、先に見た①②③の改革を実施する。このうち、②の男子読者の希望を叶えるということにかんしては、表紙の変更を検討するという形で、推し進められている。これを見てみよう。『ジュニア文芸』の表紙は、一貫して、藤田ミラノが描いている。図1は、『ジュニア文芸』の表紙である。ここには、大人びた美少女が大きく描かれている。戦前の少女雑誌は、表紙に美少女を大きく描くのが常であった。たとえば、『少女の友』では、中原淳一による表紙絵が人気を集めていた（今田 2007）。そして、淳一の手による表紙絵には、たいがい美少女が大きく描かれていた（今田 2007）。したがって、図1の表紙絵は、戦前の少女雑誌の表紙絵を踏襲しているといえる。

そうであるなら、男子読者の目には、この『ジュニア文芸』の表紙は、少女雑誌の典型的な表紙として映ったのではないかと考えることができる。たとえば、1967年7月号では、一人の男子読者が、表紙にかんするクレームを載せた。「しかるに表紙はなんだ、いつもながら女学生ごのみのスタイル。買うのが恥ずかしいくらいだ。男性の熱烈なファンのことも考えてくれ」（「読者応答室」『ジュニア文芸』1967年7月号）と。そして、この投書をきっかけにして、その後、表紙の変更を希望する男子の投書が殺到することになった。これをうけて、編集者は、1967年9月号から11月号にかけて、表紙にたいする読者の意見を募った。「男性の読者がふえています。このことに関連して、男性の読者にも買いやすい表紙を、という投書がたくさんよせられています。そのなかから、代表的な意見をいくつか選んでみました。あなたはどうか考えますか？」（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年9月号）と。また、1967年9月号では、ハガキによるアンケートを実施した。

そして、この編集者の計らいによって、通信欄では、読者による論争が繰り広げられることになった。論争を見てみると、論争となった男子読者は、その全員が、表紙の変更を希望しているこ

とがわかる。代表的な投書は、「絵が女性になっているので、買うのがむずかしい。男性が買ってもテレないような絵にしてください」（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年9月号）というものである。一方、論者となった女子読者は、変更を希望する者も、変更を希望しない者も存在したことがわかる。前者の代表的な投書は、「男の子が買いやすいように動物とか風景の絵にしたらどうでしょうか」（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年10月号）というもの、後者の代表的な投書は、「表紙を変える必要はないと思います。藤田先生あのすばらしい絵であったことが、そして女性一人の迫力ある表紙であったことが、JN のファンをます大きな力になっていると思います。内容もちろんです。だから、男性読者は、もっと勇気と自信をもって、JN を求めたらいいと思います」（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年10月号）というものである。

大論争の末、編集者は、1967年12月号において、決定を下した。「どうぞご安心ください。何号かにわたって、表紙についてのたくさんの意見をいただきましたが、藤田ミラノ先生の人気は圧倒的です」（「JN 広場」『ジュニア文芸』1967年12月号）と。大論争を踏まえて、そして、アンケートの集計結果を考慮して、編集者は藤田ミラノの表紙を存続することにしたのである。

この論争の結末から二つのことがわかる。一つに、藤田ミラノにたいする読者の支持が、非常に強固であったことである。女子読者の藤田ミラノにたいする支持は、男子読者の訴えでは、まったく揺らがなかったのである。二つに、『ジュニア文芸』が、男子読者獲得に失敗したことである。おそらく、編集者は、この論争で集まった投書の数、そしてアンケートの数を見て、男子読者の数が少数にすぎないことを知ったのだと思われる。それで、今後の『ジュニア文芸』の方向を定めたのだと考えられる。すなわち、今後、『ジュニア文芸』は、現在少数である男子読者の支持を今後において増加させる、という方向ではなく、現在多数である女子読者の支持を今後においても維持しつづける、という方向に舵を向けることにしたのである。結局のところ、男女に純愛というイメージを啓蒙するという企ては、失敗したのである。

ただ、「男子読者は、女子読者に比べると、男女交際に関心を払っていない」という見方は、他の雑誌においても見られるものであった。今田（2014）によると、『女学生の友』においても、『少年』（光文社）においても、女子読者は、男女の交際に価値を見出し、利益を獲得できるものとして描かれているが、男子読者は、むしろ男子同士の交際に価値を見出し、利益を獲得できるものとして描かれているというのである。なぜなら、女子の人格が男子の人格に比べて劣っていると見なされていたから、そして、女子同士の交際が、男子同士の交際と比べて、価値のあるものではないと見なされていたからである（今田 2014）。そして、このようなまなざしがあるからこそ、『少年』は、男女交際というテーマを一切導入することはなかったのである（今田 2014）。すなわち、「男子読者は、女子読者に比べると、男女交際に関心を払っていない」という感覚は、他の少年少女雑誌でも、共有されているものだったのである。ゆえに、『ジュニア文芸』においても、それを克服することは、難しかったといえる。

そして、男子読者獲得という企てに失敗した後、『ジュニア文芸』は、新しい企てを実行する。



図1 『ジュニア文芸』1969年7月号の表紙

すなわち、男女の性愛を導入することにしたのである。その導入の論理は、メディアにおいて性描写が氾濫していること、そして、そうであるにもかかわらず、性教育が不十分であることであった。しかし、『ジュニア文芸』に、その方向転換をさせることになった直接的なきっかけは、男子読者獲得という企ての失敗であったのである。すなわち、『ジュニア文芸』は、男子読者獲得という企てに失敗したことで、男女の性愛の導入という企てを実行することを決意したのである。なぜなら、そうしなければ、『ジュニア文芸』は、純愛という規範を維持することができないからである。

これまで見てきたように、『ジュニア文芸』は、男女の読者に向けて、純愛というイメージを伝えようとしてきた。なぜなら、男女双方の啓蒙をしなければ、純愛という規範を遵守させることができないからである。しかし、『ジュニア文芸』は、男子読者を獲得することに失敗した。こうなると、男子読者を啓蒙することができなくなる。そして、純愛という規範の維持も、困難になる。そこで、『ジュニア文芸』は、方向転換をしたのである。それは、女子に性にかんする知識を与えることで、性愛にかかわる行為をするかどうかを、女子に自身で考えさせ、自身で決定させるよう

にするという企てである。

ただし、『ジュニア文芸』は、女子読者に性にかんする知識を与えただけではなかった。今までどおり、純愛のイメージも、伝達しつづけた。これによって、女子に性にかんする知識を身につけさせ、性にかんする選択権を獲得させた上で、女子に自ら純潔を大切にすることを選択させ、純愛を維持させるように仕向けたのである。このやり方で、『ジュニア文芸』は、純愛という理想を維持しようとしたのである。

8. おわりに

本稿は、戦後日本の少女小説が、どのように男女の恋愛を導入したのかを明らかにするために、1960年代後半のジュニア小説が、どのようにして男女の性愛を導入したのかを解き明かすことにした。

その結果、明らかになったことを、まとめてみる。先行研究によると、『女学生の友』は、「どのようにして男子とつきあったらいいのか」という難問にたいして、①グループ交際、②両親の許可を得た後に開始する交際、という答えを読者に伝えた(今田 2014)。一方、『ジュニア文芸』は、「グループ交際の後、どのようにして男子つきあったらいいのか」という難問にたいして、①友人同士としてカップルになってつきあう、②愛の告白、③結婚の約束、④握手・抱擁・キスにとどめる、という答えを読者に伝えた(今田 2017)。すなわち、純愛というイメージを伝達した(今田 2017)。

そして、このような純愛というイメージは、男女双方に伝えられていたことが、明らかになった。その理由は、第一に、男子を取り込むことが、読者層の量的拡大につながるからである。第二に、純愛というイメージを現実のものとするためには、男女双方にたいする訴えかけが、不可欠であったからである。しかし、『ジュニア文芸』は、男子読者獲得に失敗した。

そこで、『ジュニア文芸』は、1968年の下半期から、方向転換をした。その方向転換とは、男女の性愛の問題に取り組むという転換であった。しかし、メディアは、その方向転換を批判した。メディアはその方向転換を性描写の氾濫であると批判したのであった。それにたいして、『ジュニア文芸』は反論した。その反論は、二点にまとめられる。第一に、性描写の氾濫であるという批判は、事実無根のものであるということ、第二に、大人のメディアには、性描写が氾濫しているにもかかわらず、学校教育の性教育は不十分であるため、十代の男女に性教育をすることが、不可欠であるということである。すなわち、『ジュニア文芸』は、独自に性教育を実施しようとしていたのである。

そして、『ジュニア文芸』によると、その方向転換はあくまで、女子読者の要望によるものであると捉えられていた。『ジュニア文芸』は、女子読者の要望を根拠にして、学校教育の性教育が不十分であること、それゆえ、女子読者が性教育を実施してほしいと懇願していることを、主張していたのである。

さらに、『ジュニア文芸』が、性教育を実施した理由は、純愛という規範を維持するためであった。男子読者の獲得に失敗した後、『ジュニア文芸』は、女子に性教育をすることで、性愛にかかわる行為をやるかどうかを、女子に選択させることにしたのである。なおかつ、今までどおり、純愛のイメージを伝達することで、女子に純潔を大切にすることを選択させ、純愛を貫かせることを選択させることにしたのである。このようにして、純愛という規範を維持しようとしたのである。

このようなプロセスを見てみると、結局のところ、『ジュニア文芸』は、「グループ交際の後、どのようにして男子とつきあったらいいのか」という難問にたいして、「純愛を貫くべきである」という答えを読者に伝えつづけたといえる。

さらに、このような『ジュニア文芸』の方向転換を見てみると、男女の性愛を導入するという転換は、『ジュニア文芸』にとって、あらためて、大きな方向転換であったのではないかということが、見えてくる。この方向転換において、『ジュニア文芸』は、学校教育における性教育が不十分であるということを、訴えている。すなわち、学校教育を批判しているのである。このことそのものが、『ジュニア文芸』にとって、大きな方向転換であると考えられる。なぜなら、今まで『ジュニア文芸』は、戦後の学校教育制度を批判したことはなかったからである（今田 2017）。むしろ、大いに称賛していたからである（今田 2017）。

この点を今田（2017）の分析結果から見てみよう。1968年の上半期まで、『ジュニア文芸』は、戦後に生まれた二つのものを称揚していた（今田 2017）。一つは、男女共学・同カリキュラムを原則とする、戦後の学校教育制度である（今田 2017）。なぜなら、それが男女交際を推進する規範を作り出していたからである（今田 2017）。二つは、その規範に「純愛」という価値を与えたジュニア小説である（今田 2017）。ゆえに、『ジュニア文芸』は、戦後の学校教育制度と、戦後のジュニア小説を褒め称えていたのである。

ところが、1968年の下半期から、『ジュニア文芸』は、性教育が不十分であるという点で、戦後の学校教育制度にたいして、猛烈な批判を展開するようになったのである。すなわち、『ジュニア文芸』は、これまでの態度を翻したのである。そして、学校教育制度とは異なる教育を実施するようになったのである。このようなことをすれば、危険視されるのは当然である。よって、『ジュニア文芸』は、メディアから激しい批判を浴びることになったと考えられる。『ジュニア文芸』が、1971年8月号をもって、休刊したのは、そのメディアによる批判とけっして無関係ではないと思われる。

しかし、『ジュニア文芸』が繰り広げた批判の声は、のちに大きな社会変動を生み出す人びとの声に連なっていくものであった。その一つは、性教育が不十分であるという批判である。この点は、人びとの間でだいに問題化されるようになった。そのため、1970年から、それまで純潔教育といわれていた教育は、性教育といわれる教育に新しく変わっていった（田代 2005）。そして、1972年には、財団法人日本性教育協会（JASE）が作られることになったのである。

もう一つは、女子が性にかんする自己決定権を持っていないことにたいする批判である。この点

は、1970年に生まれたウーマン・リブにおいても、共有されていたものであった。たとえば、田中美津は、1970年8月22日、「便所からの解放」という文章を手渡しで配布した。その文章は、女性の性の解放を主張するものであった。そして、田中美津は、のちに「ぐるーぷ・闘うおんな」というグループを作って、リブの運動を推進することになった。このように、ウーマン・リブは、性、生殖というものに真正面から取り組み、それらを女の手に取り戻す闘いを繰り広げたのである(荻野 2014)。

もちろん、『ジュニア文芸』が、直接これらの運動にどのような影響を与えたかは、明らかにすることは難しいであろう。しかし、『ジュニア文芸』が、多数の女子読者を抱えていたこと、たびたびメディアに取り上げられていたことを考えると、その影響力は無視することはできないと思われる。

【註】

- ¹ 詳しくは今田 (2017) を参照されたい。
- ² なお、今田 (2017) は、1967年1月号から1968年6月号まで、『ジュニア文芸』を分析している。
- ³ たとえば、下川編 (2007) の性風俗史年表では、1969年のできごととして、「女子中・高生向けの少女小説にセックス描写が氾濫、それらを売り物にする「ジュニア文芸」「小説ジュニア」「女学生コース」(「小説女学生コース」——引用者)が“御三家”と呼ばれる」(下川編 2007: 211) と捉えられている。
- ⁴ 「ここ一か月ほどの間に、新聞、雑誌、テレビなどで“ジュニア小説・セックスがいっぱい”というセンセーショナルな見出しつきの報道がいくつか目にとまりました」(林力「オトナの無知と偏見を打ち破ろう! 朝日新聞記事を否定する」『ジュニア文芸』1970年4月号)。

【参考文献】

- 藤本純子 2005 「戦後「少女小説」における恋愛表象の登場——『女学生の友』(1950～1966)掲載読切小説のテーマ分析をもとに」『マンガ研究』8、日本マンガ学会、20 - 25 頁
- 藤本純子 2006 「戦後期少女メディアにみる読者観の変容——少女小説における「男女交際」テーマの登場を手がかりに」『出版研究』36、日本出版学会、75 - 93 頁
- 金田淳子 2002 「教育の客体から参加の主体へ——1980年代の少女向け小説ジャンルにおける少女読者」『女性学』9、日本女性学会、25 - 46 頁
- 小谷野敦 2005 『恋愛の昭和史』文芸春秋
- 久米依子 2015 「70年代からゼロ年代へ」岩淵宏子他編『少女小説事典』東京堂出版、14 - 15 頁
- 牟田和恵 1996 『戦略としての家族——近代日本の国民国家形成と女性』新曜社
- 今田絵里香 2007 『「少女」の社会史』勁草書房
- 今田絵里香 2011 「戦後日本の『少女の友』『女学生の友』における異性愛文化の導入とその論理——小説と読者通信欄の分析」『国際児童文学館紀要』24、財団法人大阪国際児童文学館、1 - 14 頁

- 今田絵里香 2014 「異性愛文化としての少女雑誌文化の誕生」小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会、57 - 77 頁
- 今田絵里香 2015 「スター——どのようなスター像が作られてきたのか メディア研究アプローチ」成蹊大学文学部学会編『データで読む日本文化——高校生からの文学・社会学・メディア研究入門』風間書房、67 - 93 頁
- 今田絵里香 2017 「ジュニア小説における純愛という規範」成蹊大学文学部学会編『文化現象としての恋愛とイデオロギー』風間書房、35 - 79 頁
- 荻野美穂 2014 『女のからだ——フェミニズム以後』岩波書店
- 下川耿史編 2007 『性風俗史年表昭和〔戦後〕編 1945 - 1989』河出書房新社
- 田代美江子 2005 「性教育パッシングを検証する——なぜ性教育攻撃がまかり通るのか」木村涼子編『ジェンダー・フリー・トラブル——パッシング現象を検証する』白澤社、191 - 218 頁